

令和4年度「博物館等の国際交流の促進事業委託業務（実施事業）」
事業実施報告書

事業名	和歌山移民研究を軸とした国際交流事業
受託者名	和歌山移民研究を軸とした国際交流事業実行委員会

◆事業全体概要

事業名	和歌山移民研究を軸とした国際交流事業
受託者名	和歌山移民研究を軸とした国際交流事業実行委員会 (事務局：和歌山県立近代美術館内)
事業内容	海外への移民が全国第6位に上る「移民県」として、アメリカに渡った先人たちの営みを、近代史・美術史の面から包括的に振り返る研究を、国際的な協働により着手する。本質的に「移民」というテーマには、国を出る側／受け入れる側の両側面がある。そのために日米両地に残された資料とその視点を、相互の現地調査によって共有するとともに、研究者の直接の交流の場として、また一般の方々への情報公開を目的に、シンポジウムを実施する。さらに和歌山県の郷土史でもある本研究内容を、学校教育の現場に展開して、教員自身による研究活動への参画、子どもたちの郷土学習、多様性・国際理解の学習活動へと展開する。授業においてはオンラインを活用してアメリカと和歌山の教室を繋ぎ、複数レベルでの国際交流を実現させる。こうした成果を公開したり、これまで県内で積み重ねられてきた研究内容を国内外に発信するためのウェブサイトを製作、開設する。
海外連携先	全米日系人博物館
国内連携先	太地町歴史資料室、和歌山大学紀州経済史文化史研究所、和歌山大学教育学部附属小学校、和歌山市立伏虎義務教育学校
事業実施風景	   

事業成果	<p>戦前のアメリカで活動した和歌山ゆかりの芸術家たちの作品や資料を、日本双方の研究者で合同調査し、資料整理を行った。言語の問題もあり現地で十分に評価されていない資料について、その価値つけを行うことができた。海外から2名、国内他地域から2名の研究者を招聘し、和歌山の学芸員・研究者とあわせて8名の発表によるシンポジウムを実施した。それにあわせて日本における移民研究の現在を、関連研究機関を訪れて共有するとともに、和歌山の所蔵品についても、合同で調査する機会を設けた。和歌山市内や県南部の機関や学校等を回り、各所に残されている資料をフィールドワークとして調査した。</p> <p>学校教員とともにロサンゼルスで現地調査し、先人たちの歴史がどのように語られているか、また和歌山／日本に向けられた眼差しを直接に知る機会を用意した。これによって教員が本テーマを自らの課題として捉えられるようになった。その上で子どもたちにアメリカとオンラインで繋いだ授業を実施するとともに、当該教員は次年度に長期的な授業を行う予定で準備している。</p> <p>これまで県内で行われてきた研究成果を翻訳し、今回のシンポジウムの記録、またこれからのお問い合わせを継続的に国内外に発信するためのウェブサイト「移民と美術」を開設した。</p>
課題と改善策	<p>10月から事業を開始したこともあり全てにおいて時間が不足した。特に12月初旬に実施したシンポジウムは、調査と並行しての調整が追いつかず、事前広報が十分にはできなかった。残した記録を研究成果としてバイリンクで編集し、より多くの人たちに長期的に伝えることで補いたい。これを含め、実施した内容をまだ全ては公開できないが、近日中にウェブサイトで公開できる見込みである。</p> <p>学校教育への展開を、複数の校種に広げていく必要がある。それによって和歌山の学校教育における継続的な展開を見込むことが可能となるだろう。今後は教育委員会からの周知なども行っていく。ただし広い県内全域をカバーするのはいずれにしても当面は困難であり、直接関わる地域から継続的に活動を行い、その成果が他地域からも見えるように発信していくことが近道だと考える。</p> <p>今回の事業を通じて、和歌山だけでなくアメリカ側の「地域」とも繋がりを得られ、彼らの関心の高さを実感した。彼らをこれからメンバーとして参加させ、より多くの人が関わる調査研究の形を作っていく必要がある。ミュージアムを中心に、複数のコミュニティとの関係づくりが求められる。</p>
国際交流モデルの提案	<p>和歌山県立近代美術館としては、長年取り組んできた渡米画家という研究テーマを、国際交流を通じてレベルアップさせることに繋がった。また1館だけでなく県内各地、複数の機関が関わる「移民」というテーマに広げたことで、各機関が従来から取り組んでいる活動を通じて、地域の連携体制強化も叶った。学校教育への展開は、長期的に博物館を支える理解者と地域を育てるに他ならない。つまり博物館として本来の業務を行うことで国際交流が続く仕組みを考えること、また複数の立場の人々が関わる研究活動の形を考え、本事業終了後も情報発信できる体制を整えることが、今回の成果を通じて、他館に提案したい国際交流のモデルである。</p>

【Ⅰ】 事業内容

【Ⅱ】 事業成果検証

【Ⅲ】 国際交流モデルの提案

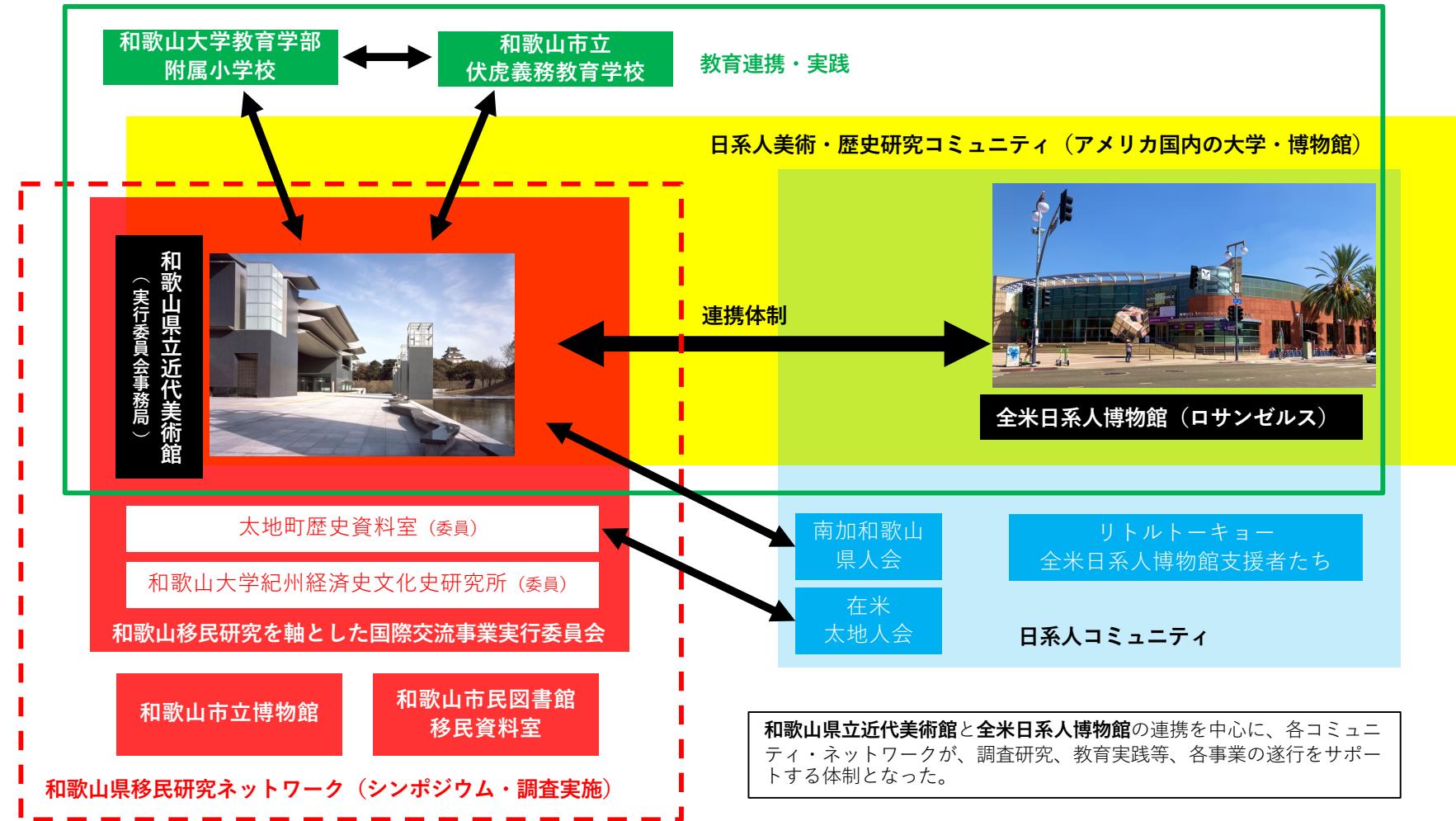
【Ⅰ】 事業内容

【Ⅱ】 事業成果検証

【Ⅲ】 国際交流モデルの提案

【Ⅰ】 事業内容 > 1. 実施体制

実施体制概略図



【 I 】

事業内容

【 II 】

事業成果検証

【 III 】

国際交流モデルの提案

【 I 】 事業内容 > 2. 学芸員等の共同調査・研究等による文化財等の新たな価値の創出に係る取組一覧

取組名	取組の概要	連携先（海外・国内）	期間（実施日）	実施回数
日系人美術作品・資料の合同調査	全米日系人博物館において所蔵作品・資料の調査を行い、読み下しやデータ整理をおこなった。ゲティセンターの写真部門において、日系人写真家たちの所蔵資料について、現地研究者も交えて調査した。国立アメリカ史博物館およびアメリカ美術館（ともにスミソニアン）で研究者と面談、所蔵資料の調査をおこなった。カリフォルニア大学マーセド校教授、アメリカ美術館（スミソニアン）およびペンシルバニア美術アカデミーの研究者らとともに、日系人画家遺族宅での作品・資料調査を行った。	全米日系人博物館、ゲティセンター、国立アメリカ史博物館、アメリカ美術館（スミソニアン）、カリフォルニア大学マーセド校、ペンシルバニア美術アカデミー	11月8日～10日 11月11日 11月17日、19日、20日 11月18日 12月27日～29日	計11回 (11日)
カリフォルニア地域日系人コミュニティに関する調査	カーメル・ハイランズでは日系人画家が描いた土地を現地研究者とともに調査した。また和歌山市の姉妹都市でもあるベーカースフィールドの博物館と周辺地域を訪れ、戦前の日系人たちの生活環境について調査した。さらに戦時中、日系人が隔離されたマンザナー強制収容所を訪れ、現地レンジャーたちと情報交換を行った。サンピドロ海洋博物館において、在米太地人会のメンバーと交流し、現地の家庭に残された資料の調査方法についても検討した。南加和歌山県人会が実施している青年育成事業を見学し、博物館の地域連携への参画方法について検討した。	太地町歴史資料室、マンザナー強制収容所、サンピドロ海洋博物館、在米太地人会、南加和歌山県人会	11月12日～14日、19日	計4回 (4日)
国際シンポジウム	アメリカから2名、国内（県外）から2名を招聘し、和歌山県内の博物館施設学芸員4人とあわせて計8人の発表によるシンポジウムを実施した。テーマは「和歌山／アメリカ：研究の『現在地』」とし、両国の視点、また日系人美術史全体の視点と個別研究等について報告と討議を行った。同時通訳つきとし、記録としても残せるよう録画を行ったため、著作権等の確認が取れ次第公開できるよう準備を進めている。	全米日系人博物館、カリフォルニア大学マーセド校、太地町歴史資料室、和歌山大学紀州経済史文化史研究所、和歌山市立博物館	12月11日	計1回 (1日)
和歌山および日本国内における移民関係作品・資料調査	前項シンポジウムの機会に、アメリカからの招聘研究者とともに国立歴史民俗博物館、海外移住資料館、東京国立近代美術館等を訪れ、所蔵資料、展示の観点等について調査した。その後、和歌山市内に移動し、和歌山大学紀州経済史文化史研究所、和歌山市立博物館、和歌山市民図書館移民資料室を訪問、それぞれの所蔵資料や研究について調査した。シンポジウム後は和歌山県中・南部に移動し、アメリカ村と呼ばれるカナダ移民のコミュニティのほか、作家が卒業した学校等も訪ねながら、太地町等紀南地域でのフィールドワークをおこなった。	全米日系人博物館、カリフォルニア大学マーセド校、太地町歴史資料室、和歌山大学紀州経済史文化史研究所、和歌山市立博物館、和歌山市民図書館移民資料室	12月6日～8日 12月9日、10日 12月12日～15日	計9回 (9日)

【 I 】

事業内容

【 II 】

事業成果検証

【 III 】

国際交流モデルの提案

【 I 】 事業内容 > 2. 学芸員等の共同調査・研究等による文化財等の新たな価値の創出に係る取組一覧

取組名	取組の概要	連携先（海外・国内）	期間（実施日）	実施回数
日系人の歴史に関する教育連携事業	学校教員がロサンゼルスを訪れ、現地コミュニティの状況を観察するとともに、全米日系人博物館における日系人の歴史とその教育方法について調査した。全米日系人博物館のエデュケーターとともに所蔵資料を調査し、オンラインプログラムの内容について検討をおこなった。帰国後、当該教員による別の教員への報告会とあわせて、事前授業の準備をおこなった。	全米日系人博物館 和歌山市立伏虎義務教育学校 和歌山大学教育学部附属小学校	12月26日～29日 1月12日	計5回 (5日)

【 I 】

事業内容

【 II 】

事業成果検証

【 III 】

国際交流モデルの提案

【 I 】 事業内容 > 3. デジタル技術やレプリカ等を活用した展示会等の開催に係る取組一覧

展示会名	展示会の概要	連携先（海外・国内）	期間（実施日）	実施回数
バーチャル・ビジット (オンライン授業)	<p>和歌山市内の小学校5、6年生（2クラス）を対象に、全米日系人博物館をオンラインで訪れるプログラム「バーチャル・ビジット」を実施した。事前授業においてデジタル画像を活用した美術作品の鑑賞を行い、あわせてビデオ教材を用いて歴史的背景についても学んだ上で、生徒たちは疑問・質問をまとめた。</p> <p>「バーチャル・ビジット」当日は、生徒たちから全米日系人博物館のエデュケーターに質問内容を伝え、双方向のやり取りを交えながら、資料写真や展示室の様子を通じて、より深い内容理解に取り組んだ。なお1クラスは大型モニターを用い、もう1クラスは各自端末を用いた方法で実施した。</p>	全米日系人博物館 和歌山市立伏虎義務教育学校 和歌山大学教育学部附属小学校	<p>現地調査および授業実施にかかる打ち合わせ（12月末）</p> <p>事前授業 伏虎義務：1月27日 附属小：1月12日</p> <p>オンライン授業の実施 伏虎義務：1月27日 附属小：2月22日</p>	<p>4日間</p> <p>1回2時限 1回2時限</p> <p>1回 1回</p>
ウェブサイト「移民と美術」	移民と和歌山についての歴史や、過去の展覧会図録原稿・研究資料などを今後包括的に発信するためのウェブサイト「移民と美術」を開設した。	和歌山大学紀州経済史文化史研究所 太地町歴史資料室	2月末開設	

【 I 】

事業内容

【 II 】

事業成果検証

【 III 】

国際交流モデルの提案

【 I 】 事業内容 > 2. 学芸員等の共同調査・研究等による文化財等の新たな価値の創出の詳細

● 日系人美術作品・資料の合同調査



ワシントンDCとロサンゼルス周辺において調査。全米日系人博物館では、所蔵作品調査のほか、日英両言語で書かれている書簡や日記等の確認や、一部読み下し作業などを行った。またゲティセンターの写真部門においては、現地研究者も交えた所蔵作品の調査を実施した。

そのほか、スミソニアンや複数の大学の研究者との合同調査を実施し、作家遺族宅への訪問や資料の調査を行った。



全米日系人博物館



ゲティセンター

【 I 】

事業内容

【 II 】

事業成果検証

【 III 】

国際交流モデルの提案

【 I 】 事業内容 > 2. 学芸員等の共同調査・研究等による文化財等の新たな価値の創出の詳細

● カリフォルニア地域日系人コミュニティに関する調査

実行委員会メンバーの太地町歴史資料室学芸員とともに、西海岸における日系人コミュニティについて、多角的な現地調査を実施した。



ヘンリー・杉本が描いた《カーメル・ハイランド海辺》（1937年 和歌山県立近代美術館蔵）と現在の様子。現地研究者の協力によって、描かれた場所が判明した。



多くの太地人が暮らしたターミナル島に、現在作られている記念碑。近くにあるサンビードロ海洋博物館での関連展示を、在米太地人会のメンバーと見学。今後の資料保存の方法についても検討した。



マンザナー強制収容所の模型（全米日系人博物館）



戦時中、日系人が隔離されたマンザナー強制収容所跡訪問は、その道中もあわせて、当時の日系人が置かれた環境を理解することにつながった。史跡を管理するレンジャーたちとも情報交換を行なった。

【Ⅰ】 事業内容

【Ⅱ】 事業成果検証

【Ⅲ】 国際交流モデルの提案

【Ⅰ】 事業内容 > 2. 学芸員等の共同調査・研究等による文化財等の新たな価値の創出の詳細

● 國際シンポジウム



アメリカから2名、国内（県外）から2名を招聘し、和歌山県内の博物館施設学芸員4人とあわせて計8人の発表によるシンポジウム。「和歌山／アメリカ：研究の『現在地』」をテーマに、研究の現在を共有。同時通訳つきとし、記録撮影を行った。（公開予定）

移民と美術をめぐるシンポジウム Vol. 1 和歌山／アメリカ：研究の「現在地」

2022年12月11日（日）11:00～17:00 和歌山県立近代美術館ホール（日英同時通訳付）

司会：青木加苗（和歌山県立近代美術館学芸員）

セッション1. 包括的な移民研究の収集・保存から

- クリスティン・ハヤシ（全米日系人博物館コレクションマネージメント&アクセス担当ディレクター）
「全米日系人博物館のコレクションについて—物語が息づくところ」
- 東悦子（和歌山大学観光学部教授／紀州経済史文化史研究所副所長）
「和歌山県における移民関連機関の連携構築と移民資料の保存と継承」

セッション2. アメリカ日系移民美術研究の現場から

- 奥村一郎（和歌山県立近代美術館教育普及課長）
「和歌山からアメリカへ—移民と美術 和歌山県立近代美術館の取組みについて」
- 山上奈津子（和歌山市立博物館学芸員）
「ヘンリー杉本と『キャンプシーン』」
- 櫻井敬人（太地町歴史資料室学芸員）
「出稼ぎ労働者と故郷の間の絆、石垣栄太郎の孤独」
- 五十鈴利治（筑波大学名誉教授）
「ニューヨークから東京そして台湾へ—重松岩吉の軌跡」

セッション3. 移民美術史の構築を目指して／日米の視点から

- シーパー・ワン（王士圃、カリフォルニア大学マーセド校教授）
「対岸の故郷—排斥時代の米国における日系芸術家コミュニティについての概要」
- 岡部昌幸（帝京大学文学部史学科教授／群馬県立近代美術館特別館長）
「移民の美術・日系アメリカ人美術史は成り立つか？—開国から排斥、ジャポニズムからマルチカルチャーへの150年」

登壇者全員による総合討議

【Ⅰ】

事業内容

【Ⅱ】

事業成果検証

【Ⅲ】

国際交流モデルの提案

【Ⅰ】 事業内容 > 2. 学芸員等の共同調査・研究等による文化財等の新たな価値の創出の詳細

● 和歌山および日本国内における移民関係作品・資料調査



海外移住資料館



和歌山県立近代美術館では展示室や収蔵庫において、シンポジウム登壇者らとともに所蔵作品の調査を実施。海外招聘研究者らはさらに和歌山大学紀州経済史文化史研究所、和歌山市立博物館、和歌山市民図書館移民資料室を訪問し、それぞれの所蔵資料や研究について調査を行った。



和歌山県美浜町三尾にあるカナダミュージアムを訪問したほか、紀南地域では資料の残る小学校から民家、墓地まで、広く太地町の研究者も交えてフィールドワークを行った。



【Ⅰ】

事業内容

【Ⅱ】

事業成果検証

【Ⅲ】

国際交流モデルの提案

【Ⅰ】 事業内容 > 2. 学芸員等の共同調査・研究等による文化財等の新たな価値の創出の詳細

● 日系人の歴史に関する教育連携事業



市内の小学校教員が、ロサンゼルスの日系人街リトルトーキョーや全米日系人博物館において、現地コミュニティの状況とその歴史について調査。実感を持って教育プログラムを組み立てられるようになるためには、現地視察が不可欠だと考えた。現地では全米日系人博物館のエデュケーターや本事業主担当の近代美術館学芸員とともに、博物館教育の観点から、日米の視点を比較検討し、オンラインプログラムの内容についても協議をおこなった。和歌山にルーツのある職員から話を聞いたり、収蔵庫で膨大な資料を見るなど、多くの経験を得て、文字情報では得られない教育材料を持ち帰った。帰国後は当該教員から参加できなかった教員に対してレクチャーを行ったほか、自主的に校内教員を集めての報告を実施した。

【 I 】

事業内容

【 II 】

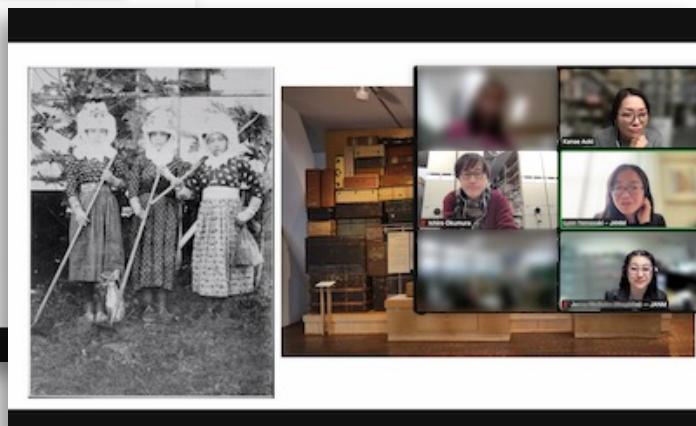
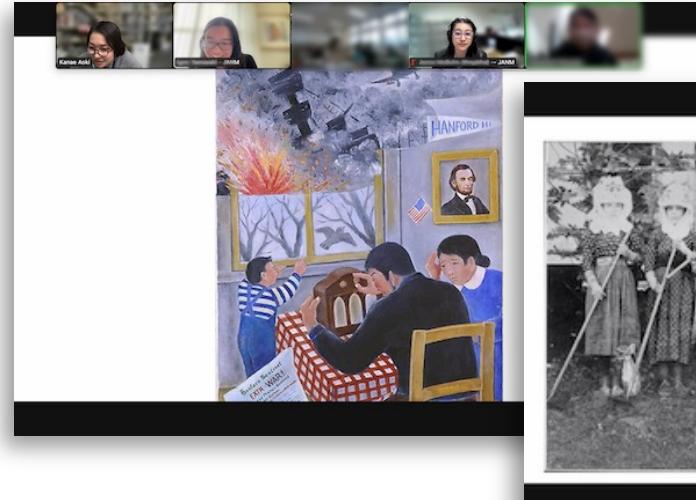
事業成果検証

【 III 】

国際交流モデルの提案

【 I 】 事業内容 > 3. デジタル技術やレプリカ等を活用した展示会等の開催の詳細

- 事前授業～「バーチャル・ビジット」



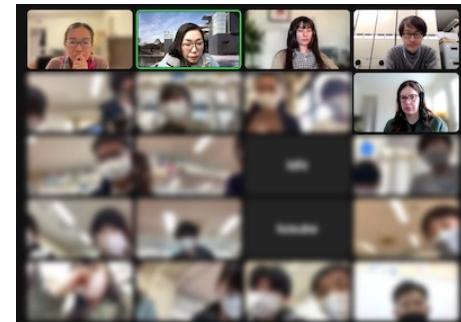
事前授業として各校で2時限続きの授業を実施。1限目は複数の美術作品図版から描かれたものを読み取りながら、作品が伝えていること、描かれた状況を想像する。2限目は、画家の生きた時代を中心とした移民の歴史についてのビデオを視聴してグループディスカッションし、さらに知りたいことを質問にまとめていった。

「バーチャル・ビジット」では、キーとなる資料写真や展示室の様子を見せながら、当時の日系人の置かれた状況を話し合った。生徒たちは自分たちが準備した質問をエデュケーターに問い合わせ、基本的には学芸員が通訳に入ったが、中には自ら英語で質問を試みた生徒もいた。

What are some things you learned from the video?

What other questions do you have?

1. What was the reason why many Wakayama people emigrated?
2. Were African Americans and other Asian Americans get discriminated?
3. What has been the contribution of the Issei people to the society?
4. Did some Issei people return to Japan after World War II?
5. Was there any discrimination after the government made an order to intern Japanese Americans?
6. Is there still any discrimination against Japanese Americans?



【 I 】

事業内容

【 II 】

事業成果検証

【 III 】

国際交流モデルの提案

【 I 】 事業内容 > 3. デジタル技術やレプリカ等を活用した展示会等の開催の詳細

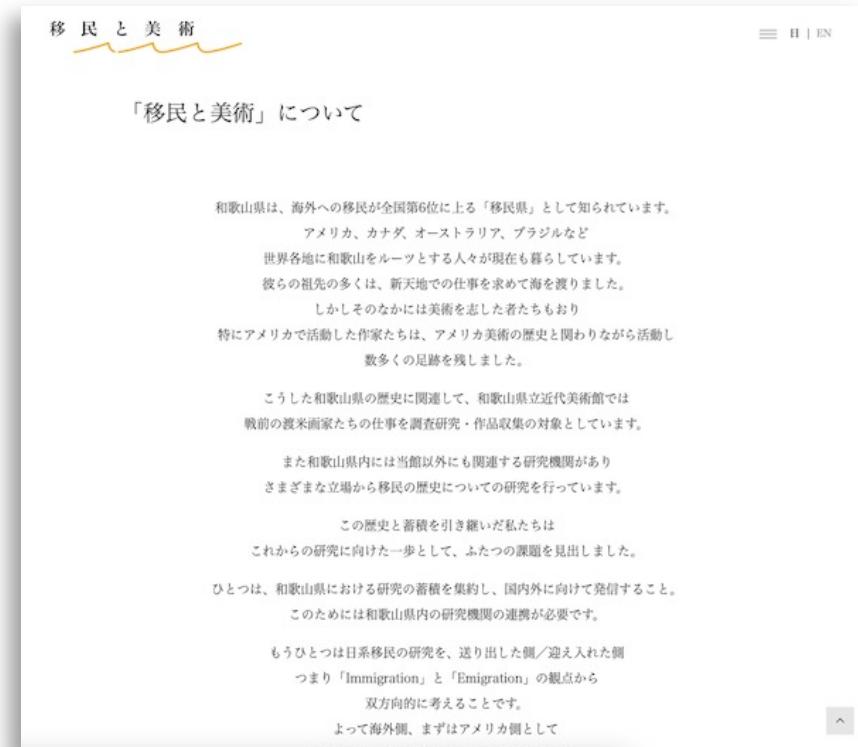
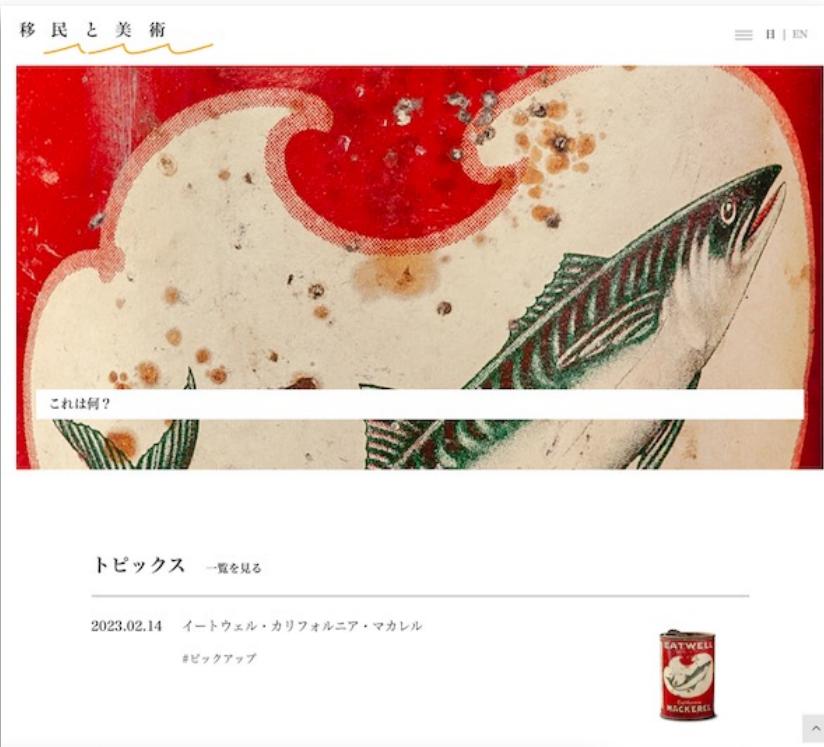
● ウェブサイト「移民と美術」

和歌山における移民研究について歴史／美術／研究／教育／連携の5本柱で情報発信するためのプラットフォームを開設した。（「教育」は次年度追加予定）

「歴史」については、移民と和歌山の関係をまずは日本側から、将来的には海を渡った側からの視点を加えるなど、複眼的に紹介することを目指す。

また「美術」については、現在和歌山県で作成中の博物館資料データベース（複数館のポータルサイト）と、次年度に繋ぎたいと考えている。ここに市町村館に参加してもらいたいと考えており、それが叶えば、異なる館種の博物館資料を、移民というテーマで繋いでいくことも可能になる。単なる「索引」ではない博物館資料のデータベース活用のかたちとして、またその地域連携の方策として、ひとつのモデルを提示できるだろう。

「研究」の項目では、過去の展覧会図録原稿・研究資料など、各館の財産であるにも拘らず、すでに一般にはアクセスしにくくなっているものを掘り起こし、英訳を加えてウェブ掲載する。これもまた日本の博物館の国際化に必須の要件であると同時に、各館の博物館活動を下支えすることにつながると考える。



【Ⅰ】 事業内容

【Ⅱ】 事業成果検証

【Ⅲ】 国際交流モデルの提案

【Ⅰ】 事業内容 > 4. シンポジウムにおける活動成果等の報告

シンポジウム名	令和4年度「博物館等の国際交流の促進事業委託業務（実施事業）」シンポジウム
開催日時	令和4年2月20日～28日
実施方法	Youtube配信（事前収録）
内容	<p>以下の項目に沿って報告した。</p> <p>1) 応募の背景、和歌山における「移民研究」というテーマ設定の意図、「交流」と連携の違い</p> <p>2) 事業実施スケジュール</p> <p>3) 事業実施報告 合同調査・研究 ・全米日系人博物館での調査 ・リトルトーキョーと日系コミュニティの現在 ・アメリカ史としての日系移民と強制収容 ・ロサンゼルスにおける和歌山県人コミュニティ ・日本国内での合同調査</p> <p>シンポジウムの実施 教育連携 蓄積・普及</p> <p>4) 「持続的な国際交流モデル」とは</p>



【Ⅰ】 事業内容

【Ⅱ】 事業成果検証

【Ⅲ】 国際交流モデルの提案

【Ⅰ】

事業内容

【Ⅱ】

事業成果検証

【Ⅲ】

国際交流モデルの提案

【Ⅱ】 事業成果検証 > 1. 設定したKPIと達成状況**KPI**

- ① 連携博物館との合同調査、シンポジウムの実施、研究報告の執筆によって、日米双方の館が所蔵する作品・資料の新たな価値が創出できる。新設するウェブサイトの来訪者数を測定し、和歌山県立近代美術館のウェブサイト訪問者数の増減等との相互関係を調査するとともに、シンポジウムの参加者へのアンケート調査を行う。
- ② 特に学校教育でのオンラインと現地（和歌山）の双方を関連づけた実践的な授業研究によって、子どもたちを中心とした新たな鑑賞モデルを提示することができる。その成果を測るために、生徒および学校管理職への聞き取り調査も行う。
- ③ 特に海外からのアクセス数によって、日本文化のプレゼンス向上を計測できると考える。これによってアフターコロナの海外来館者数増加から長期的な収益力確保を目指す。

達成状況

- ①③合同調査については、連携博物館の枠を超えておこなっており、より広い範囲でのネットワーク作りと価値創出に繋がっている。シンポジウムも予定通り実施した。アンケート調査は好評価ばかりであり、むしろその充実度合いからは二日間に分ける提案などがあった。また継続的な実施に期待する声も複数あった。しかしながらシンポジウムの内容を研究報告としてまとめることは、登壇者たちのスケジュールの都合もあり、断念せざるを得なかった。よってシンポジウムの記録に丁寧な対訳を伏し、動画として公開することで代替させたい。新設するウェブサイトは設置が遅れたため、未だ計測ができていない。ただし和歌山県立近代美術館ウェブサイトへのアメリカからのアクセス数の割合を、コロナ前を含む過去4年の10月～2月で比較すると（2019）1.22%、（2020）1.17%、（2021）0.76%であったのが、今期は1.66%まで上がっている。
- ②オンライン授業は、事前授業から実施したことによって、生徒の関心を十分に高めて実施できた。「もっと知りたい」という声や、他のクラスへの展開を、管理職からも期待された。

今後の事業展開に向けて

- アメリカからのウェブサイトのアクセス数に明らかな上昇が見られるため、新規サイト「移民と美術」の充実を図り、さらなるプレゼンスの向上に努めることが有効であると考える。
- オンライン授業の実施は、単発ではなく長期的な枠組みのなかの総括として位置付けることで、より高い効果が見込まれる。生徒の対象学年を上げて、彼らが自ら英語でのコミュニケーションをとることができるようにすれば、所蔵作品の価値づけを行える人が地域に増えることになる。もちろん生徒たち自身がその価値を国内外に発信できる力を身につけることも期待したい。

【Ⅰ】

事業内容

【Ⅱ】

事業成果検証

【Ⅲ】

国際交流モデルの提案

【Ⅱ】 事業成果検証 > 2. 事業成果の分析

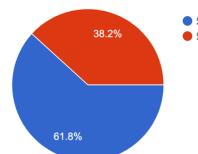
【学芸員等の共同調査・研究等による文化財等の新たな価値の創出】

事業成果

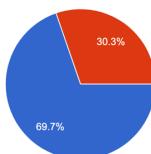
調査研究については全米日系人博物館のみならず、アメリカ各地の日系人美術・歴史研究コミュニティとのネットワークづくりができたことが大きい。本研究分野はこれまでそれぞれの国で進められてきたが、双方の視点・成果を総合することによって、次の段階へ進むことができる。その接点として、和歌山の研究者たちがアメリカ側に認識され、合同で研究できる体制が作れた。これによって日本にある作品はもちろんのこと、アメリカに所在する作品・資料の価値の理解を高めていくことができる。

和歌山で12月に同時通訳つきで開催したシンポジウム「移民と美術をめぐるシンポジウム Vol. 1 和歌山／アメリカ：研究の「現在地」は、広報が十分にできなかったものの、約60名の参加があった。アンケートによれば、和歌山県立近代美術館が移民についての研究をしていることを知らなかつたと回答した人が4割近くに上った。つまりこうした機会は、博物館の特色ある活動のプレゼンスを高めることに直結している。

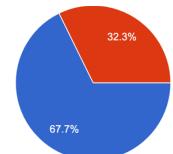
Q8. 和歌山県立近代美術館が和歌山の移民美術について収集・研究していることを知っていたか (n=34)



Q9. シンポジウムに参加して和歌山県の歴史や美術についての理解が深まつたか (n=33)



Q12. シンポジウム全体についての満足度はどのくらいか (n=31)



シンポジウムアンケート結果より（自由記述抜粋）

- 今回深まつたアメリカの博物館との交流が、双方の研究教育普及活動を発展させていくだろうことを期待
- 和歌山県でこれだけ移民に焦点を当てて取りくみをしていけるのを始めて知り、とても興味深く思いました。Vol.2もあれば、またききに来たい。
- 世代の異なる発表者のスタンスが見えた。欧米と日本の関係を中心にみてきた研究者と、90年代以降のグローバリズムの影響がリアルな世代と、向いている方向が異なっていて面白い。
- 美術館・博物館・資料館などが協力して移民の歴史などを深く考える機会をつくることはすばらしい。
- もう少し広報に力を入れた方が良い
- 複数日にかけて開催する内容だと思う。

各年度10月～2月までの和歌山県立近代美術館ウェブサイト訪問者数（日本・アメリカの比較）

	ユーザー数	対全体比	ユーザー数	対全体比
(日本)			(米国)	
2019年度	30,955	96.05%	393	1.22%
2020年度	29,223	97.00%	353	1.17%
2021年度	36,723	97.57%	285	0.76%
2022年度	42,835	95.98%	741	1.66%

課題

今回はスタートが遅かったため、シンポジウムについては準備にかけられる時間が足りなかった。広報周知が十分にできなかつた。

シンポジウムの記録動画編集や翻訳作業に手間がかかり、手順を再考する必要がある。特に内容とあわせて日英チェックができるスタッフが限られているため、負担が大きい。

「移民と美術」ウェブサイトの開設が遅れたので、効果が測定できなかつた。

改善策

シンポジウムのテーマ、登壇者の設定を早くできれば、より広く周知することができる。ウェブ広報を初めて実施したので、次回は紙媒体との併用を試みたい。

複数日にわたっての開催は避けるべきかと考えていたが、期待もあることがわかつたので、スケジュールや回数について再考するとともに、アメリカ側での実施も検討したい。

【Ⅰ】

事業内容

【Ⅱ】

事業成果検証

【Ⅲ】

国際交流モデルの提案

【Ⅱ】 事業成果検証 > 2. 事業成果の分析

【デジタル技術やレプリカ等を活用した展示会等の開催】

事業成果

● 事前授業～バーチャル・ビジット

美術作品を取り口に、その時代背景やテーマについて考えることは、鑑賞活動の基本的なかたちである。にも拘らず、積極的に他教科に組み込むことは十分に行われていない。総合的学習においては、教科の枠を超えて児童生徒が知識と体験をつなぎ合わせながら、自らの意見を持つことが目指されているが、地域学習／美術／社会／道徳／外国語／異文化理解など、多くの側面から扱うことが可能である本テーマと今回的方法はとても有効であることが確かめられた。自分たちに重ねつつ、人権意識に目を向けた生徒たちが多くいた。より時間をかけて地域の歴史として考える機会を持てれば、より多面的な理解へとつなげらるだろう。教員のロサンゼルス調査は、モチベーションの面で不可欠であった。

担当教員による振り返り【5年総合】

今回の実践では、和歌山に所縁のあるヘンリー杉本の作品を扱うことで、児童の興味を引き出し、いくつかの作品を鑑賞することで、作者の考え方や時代背景に迫ることができた。またバーチャルビジュットの授業では、具体的な日系アメリカ人の辛い経験を聞くことで、さらに移民についての理解を深めることができた。児童はじめ、移民のこととも知らず、ましてや日系人がアメリカ合衆国で差別されていたことなど夢にも思わなかつた。今回の授業で大きな衝撃を受けていた。しかしこの授業を通して、人権の大切さやこれからのがローバル社会での日本人の在り方について考えるよい機会となつた。

生徒による振り返り（抜粋）

- 日系アメリカ人以外も差別されていたことに少し驚いた。外国人、肌の色に関係なく平和に暮らせる社会にしたい。
- 初めて肌の色だけで差別されることを知りました。なんで差別されるんだろう。
- 差別はなぜ始まつたのか知りたい。
- 偏見というものはものすごく恐いものだと分かった。
- コロナの影響もあり差別が最近もあると考えると恐いと思いました。私は外国人や移民が日本にくると恐いと思っていましたが、リンさん（エデュケーター）の話を聞いて気持ちが変わりました。

管理職（副校長）のコメント

今回、美術館からいただいた「和歌山の移民」という視点は、子どもたちだけでなく、私たち教員もあまり持っていないかたるものでした。まだ少しだけですが、知ることができ、今まで何も知らずにいたことが、何だか恥ずかしいような思いになりました。先人たちの想いや功績、紡いでくれた歴史に想いを馳せ、子どもたちと共に学んで行くことを、楽しんでいきたいと考えています。

担当教員による振り返り【6年外国語】

今回の実践において、子どもたちは美術作品の目に見えること以上の学習を行なうことができたように考へている。美術作品としての技法や色彩表現を学ぶことはとても重要だが、作者の人柄や歴史、文化などを総合的に学ぶことができた。また今回の実践は、6年生に社会科の学習や外国語の学習と関連をもたせることができたので、教科・領域における子どもたちの学習の理解に深まりや、広がりをもたせることができたように考へている。例えば社会科と関連しては、日本とアメリカが戦争を行っていたことを知っている児童はいても、その間で翻弄されている移民の方の境遇や思いについて考え、移民の方々の視点で学習を深める子どもの姿を見るなどもできた。また、その思いが作品に表れているのではないかと絵画の鑑賞の視点も広がっている様子をみることができた。

生徒による振り返り（抜粋）

- 社会で習った第二次世界大戦を体験した人たちの気持ちを聞けてよかったです。
- 僕たちは、戦争など今まで起こったことは習ったけれど、その時の暮らしなどを知れた。
- （絵に描かれた）人の表情や壁にあった貼り紙から、いろんなことについて学んだ。
- 今も差別は続いていると聞いてびっくりした。
- 内容は難しかった。

課題

- 小中で試みたかったが、できなかった。校種の幅を高校まで広げられれば、より幅広く継続的な学びのかたちを検討することができる。6年生でも難しいと感じる生徒はいた。
- 内容には興味があつても、言葉の壁を感じる教員もいる。

改善策

- 担当できる教員の募集方法を再考する。今回は年度途中であったため、美術館とすでにつながりを持つ学校に限つた。外国語能力に関しても、教育委員会を通じて募集するなどして、本事業を周知し、より広く、関心を持つ教員を集めたい。

【Ⅰ】

事業内容

【Ⅱ】

事業成果検証

【Ⅲ】

国際交流モデルの提案

【Ⅱ】 事業成果検証 > 2. 事業成果の分析**【シンポジウムにおける活動成果等の報告】****事業成果**

- 5ヶ月の実施期間をどのように組み立てたのかがわかるように、スケジュール感がわかるように報告した。
- 実施内容は、館（団体）によって異なるため、テーマ設定の意図（応募の背景）と事業を継続していく方法論（「持続的な国際交流モデル」とは）に注力して報告した。以下の文言は、他館が国際交流事業に取り組む際にも留意すべきことであると考え、強調して伝えた。
 - ・国際交流は目的ではなく手段である
 - ・自館がその内容を継続できるかどうか=博物館の本来の業務と重なっていること
 - ・テーマ自体が持続的かどうか=関わる人を増やせるテーマかどうか
 - ・持続よりも「継続する（させる）」
「博物館の業務を続けること」で「国際交流が続く仕組み」へ
1事業だけ、1館同士だけよりも、連携した方が継続する
国際交流が通常業務の一部になってこそ「持続」のスタートラインに立てる
- 他の2団体が比較的小規模な館であるにも拘らず、積極的な取り組みを実現させていることにあらためて感心した。国際交流に館の規模は関係なく、本委託事業のような資金源を獲得することで、最初の一歩が踏み出せるということが明らかになっていたと思う。

課題

- 実施内容が複数あったため、制限時間内に収めることができなかったこと。
他団体のように図表や動画を活用したスライド作成を行わなかったこと。

改善策

次回、こうした報告時には、より魅力ある報告ができるよう、スライド作成に工夫を凝らすとともに、要点をより簡潔に示しながら報告することが必要だと考える。

【II】 事業成果検証 > 2. 事業成果の分析

【その他の効果】

事業成果

- 動画による広報は、SNSでの広報効果が高いとわかった（わずかな期間でもTwitterのインプレッションは、館・職員個人のアカウントとともに10000を超えていた）。これにより美術館博物館の通常の広報ルートとは違う層にも届けられると考える。
 - 國際的な活動を積極的に行なっている館だという印象が、地域に対して伝えられた。担当学芸員個人の活動に対する取材（産経新聞 <https://www.sankei.com/article/20230210-KN4TWHKQ45BZP7UFWJJ2B5TI/>）で、図らずも本事業の周知につながった。またこの記事がアメリカの新聞『羅府新報』にも掲載されると、全米日系人博物館のボランティアの一人から連絡があった。結果的に、アメリカ側にも和歌山が移民の歴史を積極的に研究していることが伝わった。



1分30秒程度のPR動画



『羅府新報』 Rafu Shimpo 2023年2月7日34012号

【Ⅰ】

事業内容

【Ⅱ】

事業成果検証

【Ⅲ】

国際交流モデルの提案

【Ⅱ】 事業成果検証 > 3. 継続事業・非継続事業の整理**次年度以降も継続する取組**

取組名	今後の展開
日系人美術資料の合同調査、シンポジウム	いまだ知られていない和歌山ゆかりの渡米画家の調査をまとめ、展覧会のかたちで紹介したいと考えている。 「移民と美術」ウェブサイトに作家名データベースのようなものを掲載したい。 シンポジウムは第2回を開催する。
カリフォルニア地域日系人コミュニティに関する調査	カリフォルニア側の日系人家庭に残された写真を、現地のコミュニティの手を借りて収集していく方法を検討したい。
和歌山および日本国内における移民関係資料調査	和歌山県内の学校等に残された関連資料の所在を明らかにする方法を検討する。
日系人の歴史に関する教育連携事業	3月の時点で教育委員会と教員募集の方策を相談する。活動は年度当初から取り組んで、半年・通年のカリキュラムを実践し、教材の共有をはかりたい。
バーチャル・ビジット（オンライン授業）	1回であっても、子どもたちのモチベーションや関心を集めると有効であった。学齢や対象、テーマに応じて内容をより充実させていく。
ウェブサイト「移民と美術」	サイト作成は一旦終了したが、データ掲載は未だ途上である。新規の研究情報発信も含め、継続的な更新を行い、周知に努める。

次年度以降に継続しない取組

取組名	理由
なし	

- 【I】 事業内容**
- 【II】 事業成果検証**
- 【III】 国際交流モデルの提案**

【 I 】

事業内容

【 II 】

事業成果検証

【 III 】

国際交流モデルの提案

【III】 国際交流モデルの提案 > 1. 本事業を通じて構築した国際交流モデルの説明

国際交流の目的

- 美術館において「海外展」と呼ばれる海外から作品を借用する展覧会は、メディア主体の企画が持ち込まれ、運営されていることが多い。しかし本来は、美術館・博物館の職員が自ら調査に出向き、企画し、借用の交渉力を身につけるなどしなければならない。にも拘らず、そうした経験をすること自体が、日本の美術館・博物館の展覧会予算では叶わないのがこれまでの状況であった。この現実に対し、あらためていま、国際交流という枠組みから日本の美術館・博物館が海外と接点を見つけることが求められる。その際、館が本来業務として行なっている研究テーマや収集の観点から国際交流のきっかけを見出しができれば、それはゼロからのスタートではなく、これまでの仕事の上にもうひとつ積み上げるという作業になるだろう。またそれは、展覧会実現への最短ルートであるとも言える。つまり国際交流自体を目的にするのではなく、**国際交流という手段によって何ができるのか**を考える必要性である。

持続的な国際交流＝持続的なテーマ

- 一方で自分たちの抱えるテーマを、文化財・作品・資料の個別の属性にとどめるのではなく、さまざまな文脈に置き直しつつ、それを「Generalize 汎用化」をすることができれば、多様な活動につなげられる。かつ、美術館・博物館の職員だけでなく、外の人たちを巻き込み、ともに活動を支えるメンバーとして位置づけることは、博物館の地域連携の理想的なかたちでもあるだろう。
- 「持続的な国際交流」について考えるならば、それを**継続する工夫**が必要である。今回の委託事業のようなかたちは、外部資金・特別事業として扱われてしまうことが多いが、そうではなく館本来の業務にいかに結びつけておくかがポイントになると考える。たとえばウェブサイトなどは、新規製作する予算を各館が準備することは極めて難しい。しかし「設置する」という最初の一歩に手助けがあれば、それ以後は館の**通常業務のなかで継続していく**ことが比較的容易になる。たとえば今回作成したウェブサイトは、和歌山県立近代美術館ウェブサイトのサブドメインとして設置したが、それは新規サイトとして見せながらも、ランニングコストを追加で発生しないようにしたかったからである。こうしたプラットフォームを持つことは、特に海外の博物館のプランディング方法にも結びつけやすく、充実させればほど、より国際交流をしやすくなっていくと期待する。また今後、このウェブサイトを作品データベースと結びつけ、館や地域が所蔵する文化財の魅力を発信する新たな窓口として育てていくことで、国際的な博物館施設を有する地域としてのプレゼンスを高めることにも尽力したい。

「日本文化のプレゼンスを高める」とは

- 今回、全米日系人博物館を中心とした研究機関や研究者とともに、日系人美術や移民資料とともに調査した。この「ともに同じものを見て、価値づける」という作業が、日本文化のプレゼンスを高めることに欠かせないと強調したい。「誰かが価値を認めてくれたから貴重」なのではなく、また一方的にこちらから自分たちの伝えたい価値を押し付けるのではなく、**文化や文化財の価値判断に同じ目線で責任を持ち、視点や文化の違いを尊重しあえる関係**をかたちづくることが、この国際的な時代の博物館とその専門職能を有する学芸員たちに求められる態度であるだろう。

【Ⅰ】

事業内容

【Ⅱ】

事業成果検証

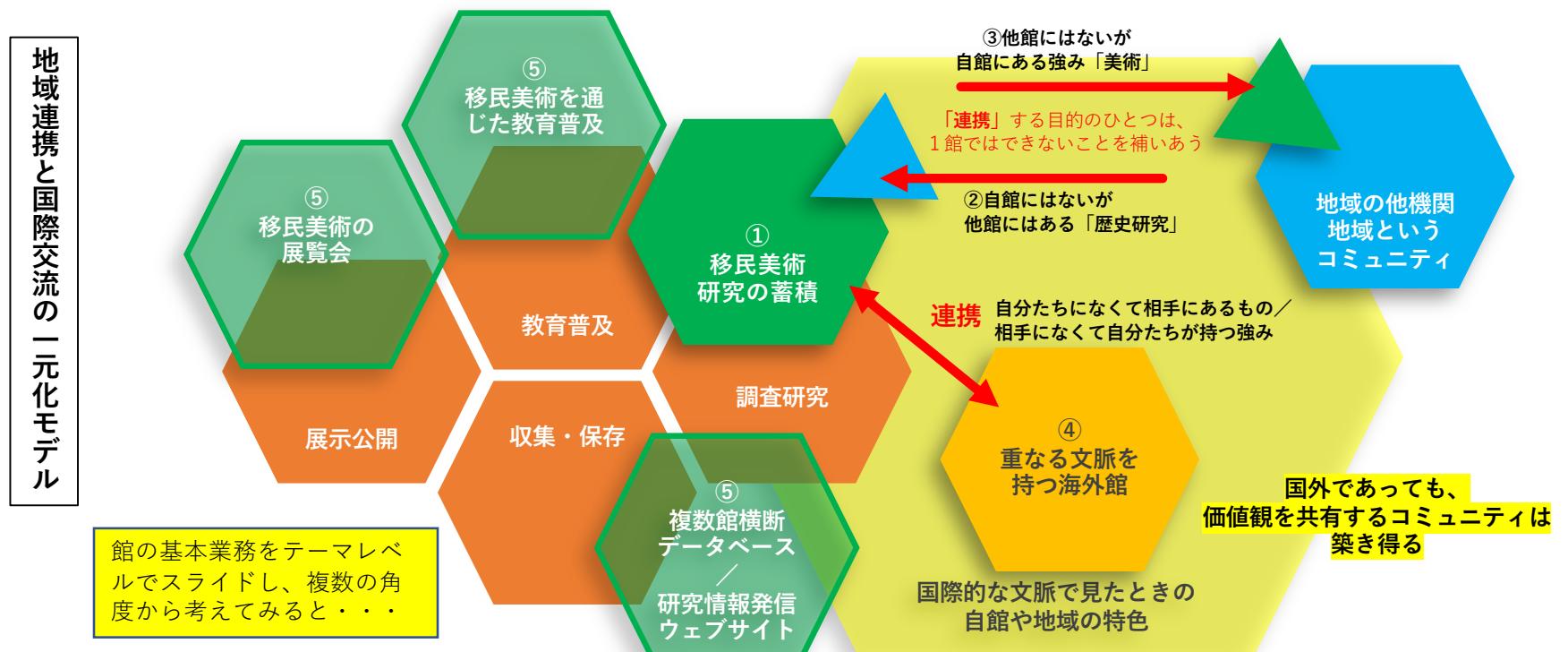
【Ⅲ】

国際交流モデルの提案

【Ⅲ】 国際交流モデルの提案 > 2. 他博物館等への展開について

テーマと事業内容を定める方法の提案

他博物館等への展開するために、その方法論を下に図式化した。国際交流それ自体を目的にするのではなく手段と捉えることを前項に記した。つまり考え方の鍵は、本来の博物館業務を分析することにある。地域やテーマによる国内他館と連携ができるなら、「海外」もまた世界という地域であり、同じ価値観を有するコミュニティの仲間となり得る。



①自館の本来の活動にあるテーマを、②より深められる要素を考える→「渡米画家を移民史に汎用してみるとどうなる？」

③足りないものを持っている人（館）を探す→「地域」の別館種 相手にも足りていない要素があるはず ★連携

④世界という「地域」で見た時に、何が補い合える？→重なる文脈を持つ海外館 ★連携

⑤そのテーマで行える博物館本来の事業は？→調査研究・収集保存・展示公開・教育普及